

<指導の実際>

① 教育データの活用について(○成果 ●課題)

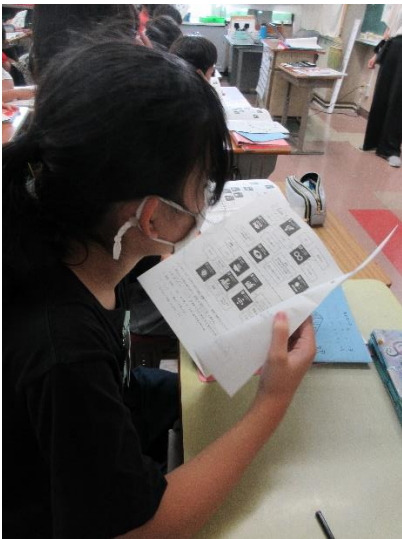
活用したデータ資料・・・スクールダッシュボード、令和6年度さいたま市学習状況調査、自作アンケート

○スクールダッシュボードの量的データに加えて、自由記述からも質的に分析したことで、多角的な観点から実態把握に努めることができた。また、学級のG・Sに関するデータだけでなく、身の回りの生活への関心についてや、SDGsについてなど、「英語が言えるようになる」その先にある、単元のゴールを達成するために必要な手立てについて考えることができた。

●小学校G・Sにおいては、学力としての英語力を分析して指導に活かすことが難しいため、指導改善に向け、客観的にデータ分析をしていく必要がある。その上で今回は自由記述を使用した、「分からないことを分かっていて、それを言語化できる児童」は自己調整力や自己認知力が高いと考えられる。一方、本当に困っている児童は自由記述にも言語化できないと考えるため、数値や自由記述だけでなく、児童の活動の取り組みについてより丁寧に見取る必要がある。

●児童の実態把握についてはできたものの、直接的な指導に十分に生かせなかった。児童に対して何ができるか、より具体的に記す必要があった。

② 指導と評価の手だての効果と課題、児童の反応



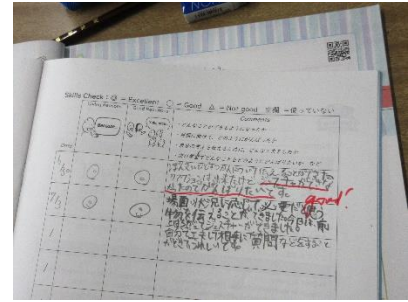
手だて① 児童と共に行う単元計画の作成と目標の確認

単元のはじめに、何の表現を学びたいか、どのような練習がしたいかなど児童から意見を集め、単元計画を各クラスで作成した。また、毎授業で単元及び本時の目標、獲得したい普遍的なスキルなどを単元計画と照らし合わせて確認することで、児童が目標を意識できるような工夫を施すことができた。一方、単元計画はクラス全体で意見を募っ



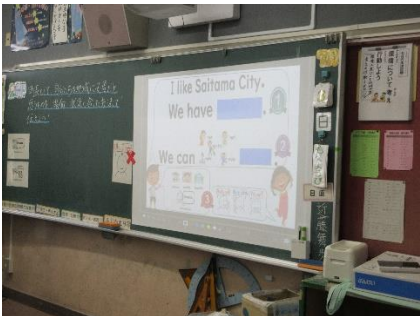
手だて② コミュニケーションカードの活用

児童は、コミュニケーションカード(コミュニケーションを行った相手からサインと評価を貰うためのカード)を使い、幅広くクラスメイトと関わって話し、様々なモデルを見たり他者から評価を貰ったりすることで、自分のコミュニケーションの改善に繋がられるようにした。レベルを設定し、児童が相互評価をする機会を設けることで、児童のパフォーマンスに改善が



手だて③ 学習に対する自己調整力を高める授業

自分は何ができて、何に課題があるかなどを記述できている振り返りを紹介することで、自己調整のための視点を与え、メタ認知の視点で学習内容を振り返ることができるようにした。本時の授業において、振り返りにモデルを真似て書いている児童もいれば、今まで通りの感想を記している児童も一定数いた。モデルの提示は元々自己調整力の高い児童のみ有効なため、振り返りに関する個別の指導が今後必要になる。

<p>たため、自分ごととして捉えられているかどうかについては疑問が残り、改善の余地があると感じた。</p>	<p>見られた。</p>	
 <p>手だて④ 個々の習熟度に応じたレベル設定</p> <p>コミュニケーション活動においてレベル1～3まで設定し、個人の習熟度に合わせて発話内容を選択・調整できるようにするようにした。手だて②に記したように、コミュニケーションに改善が見られた。</p>	<p>手だて⑤ 探求的な内容における協働的な学び合い</p> <p>社会的な内容に対して困難を示す児童が多いと予測できるため、奈良町、別所町にある施設や設備と必要なものについては、協働的にアイデアを出し合った。また、発表内容についても「町役場の職員」という立場に立った時に最適かについて客観的に考えられるよう、ペアやグループで協働的にアドバイスし合いながら取り組んだ。目的・場面・状況に応じた児童の発話が見られたため、協働的な学び合いは有効であった。</p>	

<協議会>

授業者の意図・反省

- ・データで上がっていない児童について、指導の余地があると感じた。
- ・G・Sにおけるデータ活用について、ご意見頂きたい。

研究協議(○成果 ●課題)

1. 授業全体の評価

- 「自治会長になったら」「町づくり」などの場面設定が非常に効果的で、児童が活動を自分事として捉え、主体的に話したり調べたりする姿が多く見られた。
- ゴールやレベル(段階)が明確に示されており、何を目指して学ぶのかが児童に分かりやすい授業構成だった。
- 児童同士のコミュニケーションが活発で、楽しさと意欲の高さが随所に見られた。

2. 教育データの活用について

- スクールダッシュボード、授業アンケート、市学調、自作アンケートなど、複数の教育データを組み合わせて実態を把握し、授業に反映していた。
- 自由記述を丁寧に読み取り、つまずきや意欲の差に応じた支援やレベル設定につなげていた。
- 継続的なデータの蓄積により、児童の変容を見取りやすくなっている。
- アンケート内容が意欲面に偏っているため、技能(話す・聞く)のデータも取ると、より授業改善に生かせるのではないか。

3. 「深い学び」「わかった」「もっとやりたい」

- レベル別の目標設定(ルーブリック的構造)により、どの段階の児童も「自分にもできる」「目指したい」と思える仕掛けが効果的だった。
- 活動後に視点を変えて問い直す展開(町長のイメージを考え直すなど)により、表現や内容が大きく深まる場面が見られた。

4. 言語活動(英語・日本語の扱い)

- 日本語を交えた授業展開については、理解を優先するために必要であり。高度な内容(SDGs・地域づくり)を扱ううえでは妥当である。

5. 明日の授業に生かしたい点

- ゴールとレベルを明確に示す授業設計
- 児童が納得できる「目指したくなる」ルーブリックづくり
- データを活用した、つまずきへの即時的な支援
- 必要感のある場面設定で、全員を学習に引き込む工夫

指導講評

教育課程指導課 国際教育係 主任指導主事(兼)係長 伊澤 幸恵 様

- ・本時の単元は内容が難しく、児童に「英語を使う必要感」をもたせることが重要である。目的・場面・状況を具体的に設定することで、英語を使う必然性が生まれる。さらに、児童に身に付けさせたい表現を明確にし、それを無理なく使いながらやり取りができるような授業設計を考えることが大切である。
- ・6年生の「理想のまちづくり」の学習にSDGsの視点を加えることは難易度が高い。そのため、まず児童が自分の思いや考えをしっかりとつことが重要となる。探究の時間を活用し、調査・課題設定・情報収集・まとめといった過程を経て、自分なりの考えを形成したうえで表現する時間を確保することが必要である。また、他者の異なる考え方に触れることで、児童の思考はさらに深まっていく。
- ・カリキュラム・マネジメントの視点から見ると、外国語(G・S)は教科横断的な学びと関わりの深い教科である。表現することに苦手意識をもつ児童に対しては、活動のレベルを1~3段階に分け、児童自身が目標を選択できる仕組みを設けることが効果的である。自分に合ったレベルを選び挑戦する仕掛けは、個別最適な学びの実現につながる。今回の授業では多くの児童がレベル3を達成していたため、実態に応じて段階設定を調整していくことも考えられる。
- ・「みんなにとってよい街」を考えるという設定のもとで一定の制限を設けたことにより、児童が自分の好みだけでなく全体の視点から考えることができ、思考を深めることにつながっていた。
- ・また、授業者が楽しそうに英語を使う姿は、児童にとってよいモデルとなる。教師自身が目指すゴールの姿を示し、教師と児童がその姿を共有することは、どの教科においても重要である。単元を通してどのような力を育てたいのか、どのような子どもを育てたいのかを教師が明確に計画し、ねらいをもって授業に臨むことが求められる。
- ・評価については、単元の最初から毎時間評価する必要はなく、学習が進み児童の力が高まったタイミングで適切に行うことが重要である。知識・技能を習得させた後、それを活用して思考・判断・表現につなげ、友達とのやり取りを通して主体的に学ぶ場面を見取り、評価する。45分の授業の中で全てを把握することは難しいため、振り返りの時間を活用して児童の学びを見取ることが有効である。振り返りでは、児童が自分の学びをどのように自己調整しているか、次の学習につなげようとしている

かを把握することができる。したがって、授業の最後には必ず振り返りの時間を設けることが望ましい。さらに、次の時間の導入で前時を想起させ、実際に表現を使ったやり取りを行うことで、学習内容の定着が図られる。

教育研究所 主任指導主事 吉野山 慎 様

- 本日の授業は、スクールダッシュボードの授業アンケートや学力調査など、複数のデータを活用して授業づくりが行われていた点が評価できる。多様なデータを用いることで、児童を多面的・多角的に捉えることができ、一つのデータだけでは見えない実態を把握することにつながる。
- 全体的な傾向を把握する際には、国や自治体を実施する調査など、個人的なデータではない公的なデータを活用することが望ましい。その点で、市学力調査のデータを用いて児童の実態を捉えたことは効果的であった。
- スクールダッシュボードの利点は、継続的にデータを蓄積できる点にある。短時間のアンケートであっても、毎日継続的に実施することで、児童の実態や変化を把握しやすくなる。
- 教育データはRPDCAサイクルの中でも特に「R（リサーチ）」による状況把握や「C（チェック）」の評価の段階で有効に活用できる。本日の実践では、状況把握に基づく指導方針の決定において、データが効果的に用いられていた。今後は、データを活用して原因の追究や解決すべき課題の発見につなげていくことが期待される。
- 例えば散布図を用いることでデータ間の相関関係が見える場合があり、そこから課題の背景や原因を探る手がかりを得ることができる。実態がより明確になれば、解決すべき問題の発見や原因分析に役立つ。
- 今後は、児童が個別最適な学びや協働的な学びをどの程度行えているか、また主体的・対話的で深い学びがどの程度実現しているかを把握する質問項目を、2学期頃から調査に加える予定である。
- また、記述回答の分析にテキストマイニングを活用していた点も有効であった。児童の記述データをテキストマイニングツールに入力することで、特徴的なキーワードを抽出でき、児童の考えや意識を客観的に把握することができる。こうしたデータは児童の声を根拠として示す資料にもなり、授業改善の手がかりとなる。
- 教師が日常的に行っている実践に加えて、教育データを活用することで、授業づくりの根拠がより明確になり、これまで気付かなかった課題や視点に気付くことができる。教育データを効果的に活用し、授業改善につなげていくことが今後重要である。